

心の風景 —我が母校—

佐渡市立小倉小学校

2月2日、小倉小学校の閉校式が無事に終了しました。

創立139年の伝統ある学校でしたが、平成25年3月をもってその歴史の幕を閉じることとなりました。

今年度の児童数は、一学期に2名の転出があり、現在は11名となりました。小規模校のよさを生かし、全校体制で多くの教育活動を行っています。そのため学年の枠を超えた家族的なかかわりが見られ、全員が親密な絆で結ばれています。

また、地域社会との連携も強く、お互いに協力しながら学校行事を創りあげています。特に運動会と文化祭では、小倉・長谷自治公民館との協働によって行い、前日の準備や本番では多くの地域住民の方々からの参加によって賑



わい、学校の規模を感じさせない大きな行事として行われていました。

そして、小倉小学校の最大の特徴として「子ども鬼太鼓」があります。

地域に伝わる小倉鬼太鼓を教育活動の一つとして取り入れ、年間を通して全校体制で行っています。創設以来39年間続いてきた活動は、校内の活動にとどまることなく、地域との深いかかわりをもって行われてきました。

小倉・長谷地区の小倉例祭や長谷寺のぼたん祭り、畑野地区の安寿天神祭などへは毎年参加しています。また、都市教育長会議や郷土芸能発表会へ参加するなど、地域を越えた佐渡全体での活躍も見られます。

このように大勢の人前での活動を経験してきているため、全員の子どもたちが人前で物おじすることなく、堂々と声を出し発表することができます。

平成25年4月からは、新生畑野小学校としてスタートします。子ども鬼太鼓で培った精神を生かし、自分に自信をもつて堂々と学校生活を送っていくことを期待しています。



◆教育委員会学校教育課（両津支所内）
23—4898



佐渡をジオパークに

ジオパーク、推進日記

23

桃の節句に

3月と言えば桃の節句。女の子のいる家庭では、おひな様を飾られたのではないのでしょうか。

桃の節句に欠かせない雛人形ですが、佐渡島では昔、土で作られた「土人形」が飾られていました。

佐渡島の土人形の歴史は江戸時代末期からはじまり、京都の伏見人形が原型とされています。佐渡の土人形のはじまりは八幡とされ、八幡人形と呼ばれます。土人形は島内各地で作られ、その土地の名前を取って、夷人形、長木人形、相川の土人形、畑野人形、新穂の土人形、大石人形などと呼ばれています。

高価な京雛や江戸雛の普及版として土人形が作成され、庶民の間に雛人形を流行させる大きな要因となりました。土人形の種類は幅広く、雛人形から子供のおもちゃ、幸福を招く縁起物の福助なども作成されました。子供たちは、自分で土人形を作り、劇をして遊んでいたとのこと。このことから、土人形は庶民に広く親しまれていたことがわかります。

土人形の作成は農閑期の副業だったそうです。春になると山から土を運び、土づくりをします。5月ごろまでに型おこしを行い、秋まで納屋に保管しておきます。そして、10月末ごろ、農作業が暇になると釜で人形を焼いていたそうです。

農業の島である佐渡島にびつたり副業だったのではないのでしょうか。そして、副業だったことが八幡人形の製作を長続きさせる要因になったものと考えられています。

八幡人形の材料である粘土は、沢根（野坂）の土が最も良かったという記述があります。白くて粘り気がある粘土は、焼いても細かいひび割れが入らず、土人形作りにとっても適していたそうです。佐和田付近には、佐渡島が海に沈んでいた時代から高く隆起した時代の地層があります。八幡人形はその時にたまった泥を使っているのかもしれない。佐渡島の歴史があるからこそ、土人形の歴史もあるのです。そして、そこに住む私たちは土人形のようにならな

「文化」と、それを生み出した佐渡島の「大地」を守っていかなくてはならないのです。



さまざまな種類がある土人形（山本家所蔵）

◆教育委員会社会教育課ジオパーク推進室（両津郷土博物館内）
23—2101